長迫遺跡発掘調査報告

—県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1 9 8 2

広 島 県 教 育 委 員 会
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に …… (1)
Ⅱ　調　査　の　概　要 …… (2)
Ⅲ　遺　構　と　遺　物 …… (3)
(1)　弥　生　時　代 …… (3)
(2)　古　墳　時　代 …… (6)
Ⅳ　ま　と　め …… (16)

挿　図　目　次

第１図　長迫遺跡周辺遺跡分布図(１：25,000) …… (1)
第２図　長迫遺跡調査区及び遺構配置図 …… (2)
第３図　長迫遺跡第１号住居跡実測図（１：60） …… (3)
第４図　長迫遺跡第２号住居跡実測図（１：60） …… (4)
第５図　長迫遺跡第３号住居跡実測図（１：60） …… (4)
第６図　長迫遺跡第１・２号住居跡出土遺物実測図（１：３） …… (5)
第７図　長迫第１号古墳実測図(１：200) …… (6)
第８図　長迫第１号古墳主体部実測図（１：40） …… (6)
第９図　長迫第２号古墳実測図(１：200) …… (7)
第10図　長迫第２号古墳１・２・４号主体部実測図（１：40） …… (9)
第11図　長迫第２号古墳３号主体部付設排水溝実測図（１：40） …… (10)
第12図　長迫第２号古墳３号主体部実測図（１：40） …… (折込)
第13図　長迫第１・２号古墳出土土器実測図（１：３） …… (11)
第14図　長迫第２号古墳溝出土石器実測図（２：３） …… (11)
第15図　長迫第１・２号古墳各主体部出土鉄器実測図（１：２） …… (12)

表　目　次

第１表　長迫遺跡出土遺物観察表……（ 13 ）
第２表　周辺遺跡対比表……（ 17 ）

図 版 目 次

図版１ａ　長迫遺跡遠景（南東より）
　　ｂ　長迫第１号古墳調査前全景（南より）
　　ｃ　長迫第２号古墳調査前全景（南西より）
図版２ａ　長迫遺跡第１号住居跡（南東より）
　　ｂ　　同　　上　　（南東より）
図版３ａ　長迫第１号古墳全景　（南より）
　　ｂ　　同　　上　主体部（北より）
　　ｃ　　同　　上　溝　　（南より）
図版４ａ　長迫第２号古墳全景（南西より）
　　ｂ　　同　　上　１号主体部（南西より）
　　ｃ　　同　　上　２号主体部（南西より）
図版５ａ　長迫第２号古墳３号主体部（南西より）
　　ｂ　　同　　上　付設排水溝（左：北西より，右：南東より）
図版６　　長迫遺跡出土遺物

例　　言

1．本報告書は県営農地開発事業に伴い，昭和56年６月から７月にかけて実施した長迫遺跡群の発掘調査報告である。

2．発掘調査は，広島県教育委員会から委託を受け財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．本書はⅠ・Ⅱを植田千佳穏が，Ⅲ・Ⅳを三枝健二が分担して執筆し，両者が協議して編集した。

4．遺物の写真撮影は青山透が行った。

5．第２号古墳主体部の土壌分析については広島大学理学部柴田喜太郎氏の御教示を得た。記して謝意を表する。

6．本報告に使用した25,000分の１地形図は建設省国土地理院発行の地形図を使用したものである。

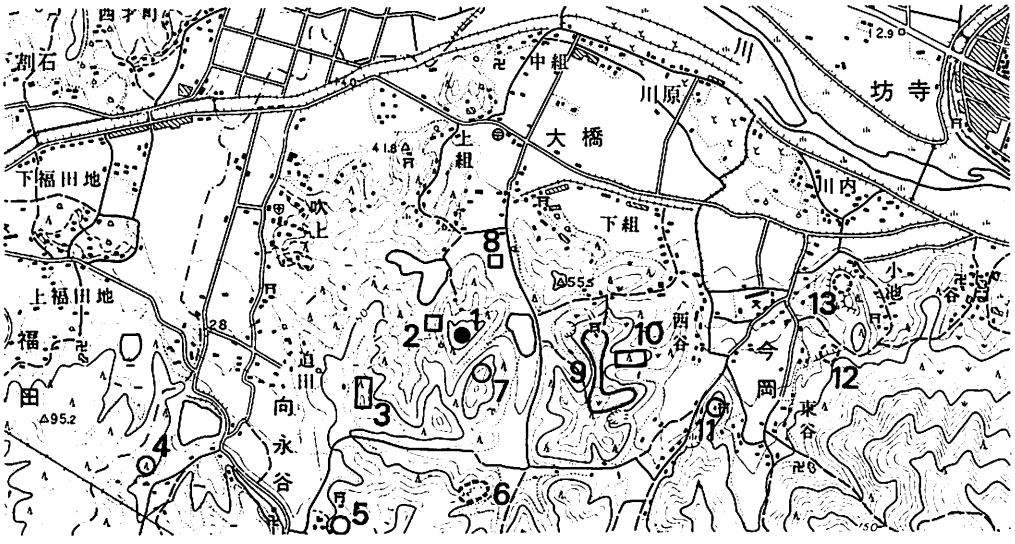
Ⅰ はじめに

本書は，広島県営農地開発事業大橋地区造成地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の第２年次調査報告である。

本年度の調査は，昭和55年度に行った分布調査，試掘調査に基き石鎚権現第９・10号古墳と長迫遺跡について発掘調査を行うこととしたが，発掘調査そのものについては昭和55年度と同様に文化庁と農林省との覚書「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」Ⅰの(5)項に基き農政部負担分と農家負担分に分けて行うことになり，前者は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが長迫遺跡を，後者は県教育委員会が石鎚権現第９・10号古墳を実施した。

長迫遺跡の調査は，昭和56年６月から７月にかけ約１か月間，約3,000㎡について行った。

なお，調査にあたっては広島県福山農林事務所芦品土地改良事業所，福山市教育委員会及び地元大橋・今岡・向永谷地区の方々から多大な協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。



第１図　長迫遺跡周辺遺跡分布図（1：25,000）

1．長迫遺跡，2．出尾池遺跡，3．迫田遺跡，4．銭山古墳，5．下高倉古墳，6．十二塚，7．穴田古墳，8．石棒出土地，9．石鎚権現古墳群，10．石鎚権現遺跡，11．西谷古墳，12．今岡古墳，13．今岡小池古墳

Ⅱ 調査の概要

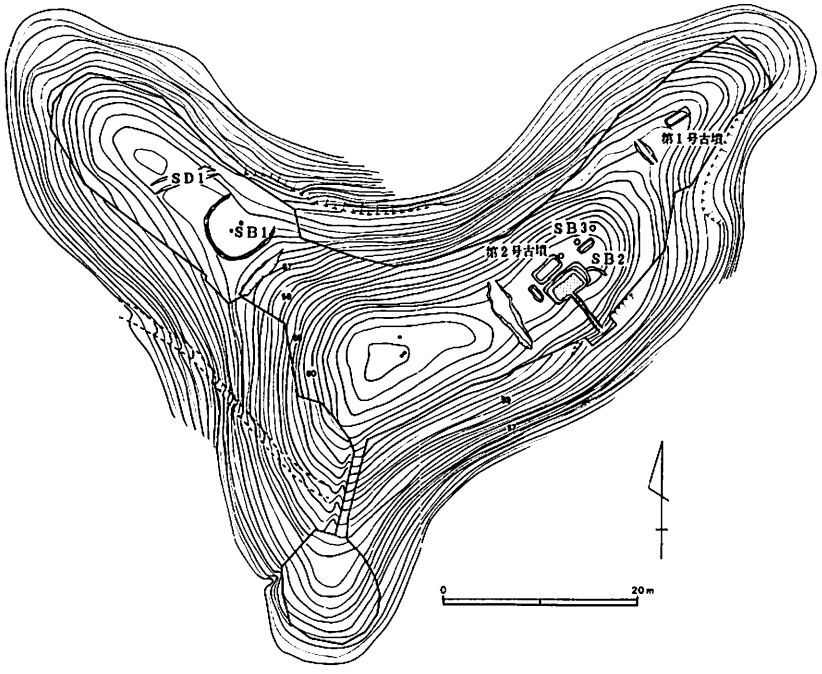
本遺跡は丘陵の最高所より北東，北西，南の三方向に尾根が伸びており，調査区の設定はこの地形に合わせてＹ字状に行った。北東調査区は56×10～14ｍで，南半には30×８ｍの細長い平坦面があり，それより北に向かい緩やかに下ってくる。北西調査区は32×10ｍで，丘陵の最高所より比高差４ｍで24×７ｍの細長い平坦面がある。南調査区は22×１～12ｍで南半には２×２ｍの平坦部がある。

遺構は調査区最高所では明瞭でなかったが，派生する尾根に集中し，現表土下10cm程度で検出できる状態であった。

調査の結果，古墳２，住居跡３，溝１，ピット３を確認した。古墳は北東調査区の北半に並んで存在し，北より第１号古墳，第２号古墳とした。

住居跡は弥生時代中期のもので芦田川南岸での数少ない資料を付加した。古墳は前期のもので特に第２号古墳３号主体部は排水施設をもつ竪穴式石室で先年調査の福山市加茂町石鎚山古墳群との関連で興味深いものである。

溝（ＳＤ１）は北西調査区の平坦面の中央付近を東西に掘り込んだもので性格は不明である。その他，北東調査区の平坦面南西半ではピット３を確認し，北西調査区の平坦面北西半や南調査区より遺物が多少出土したが，他に遺構，遺物を確認できなかった。

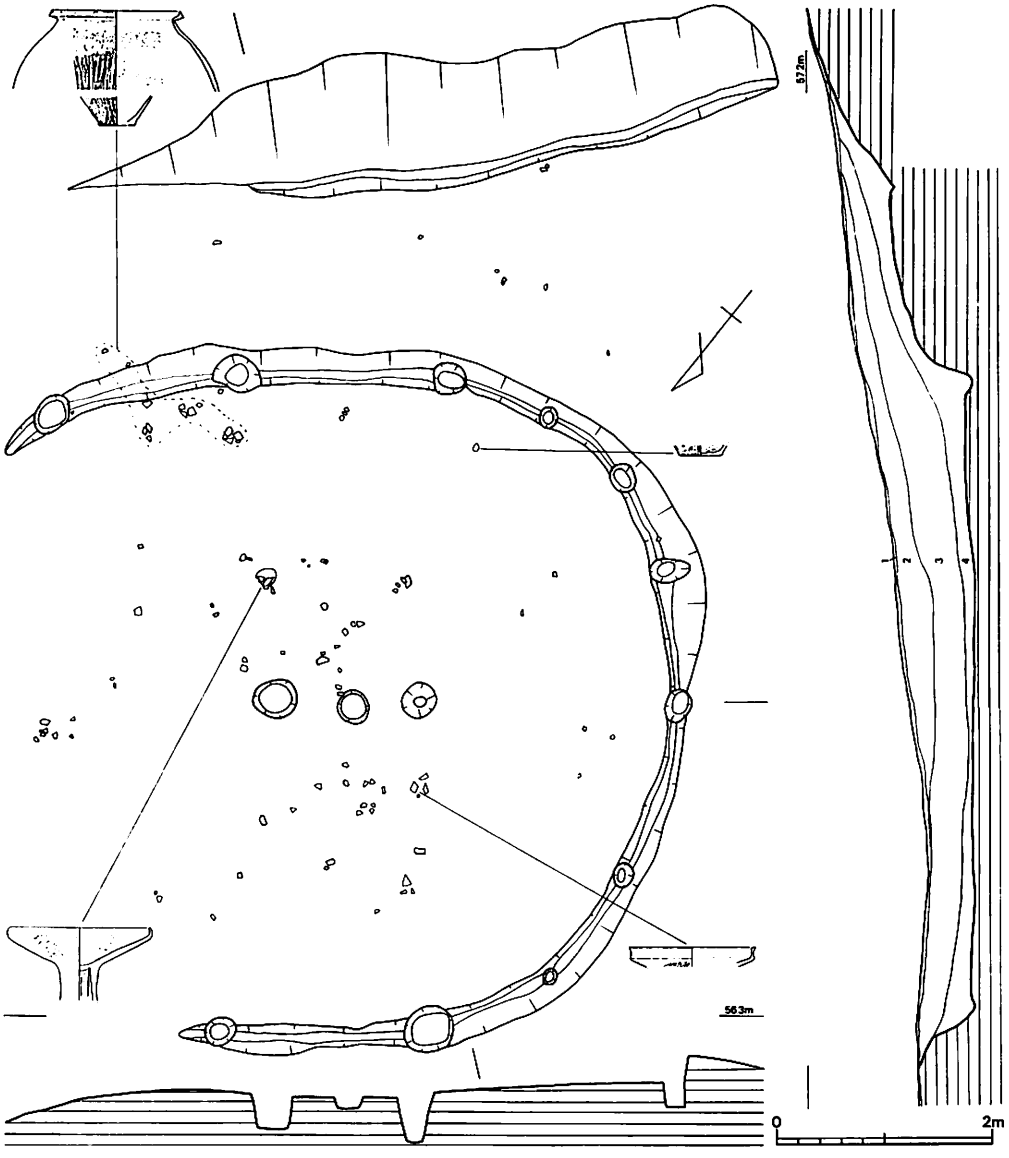


太線内調査区　アミ目は石室および排水溝

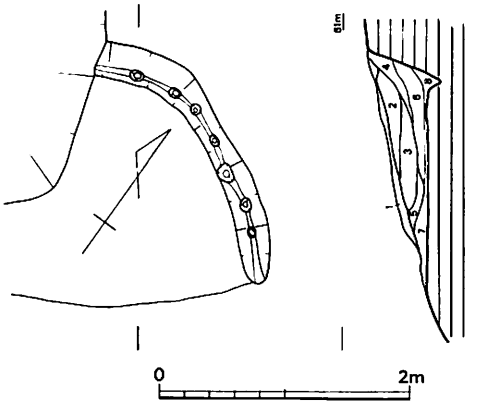
第２図　長迫遺跡調査区及び遺構配置図

Ⅲ 遺構と遺物

(1) 弥生時代



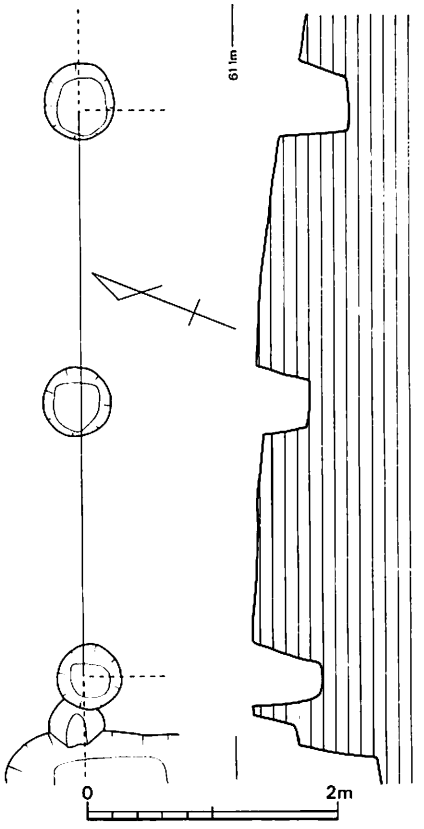
第3図　長迫遺跡第1号住居跡実測図（1：60）



第4図　長迫遺跡第2号住居跡実測図（1：60）

第1号住居跡—ＳＢ1（第3図，図版2）

南北に延びる調査区丘陵の頂部から，北西に派生する尾根のつけ根付近で検出した。北東斜面側を流失するが，推定約7×6.5*m*のほぼ正円に近いプランを呈す。また東南側には丘陵頂部からの傾斜変換部分に長さ6.5*m*にわたり，浅い側溝をもつカット面をもち，住居跡との間に平坦面を有す。住居壁はこの部分で最も遺存が良く，高さ約60*cm*を測る。床面の状態は良く中央部には尾根に直交して（N50°E）1.4*m*幅で2本の柱穴を検出した。中央には炉穴をもつ。また側溝中には1～2*m*間隔で11個のピットが配されている。出土遺物（第6図）のうち弥生土器の多くは床面とテラス面直上から出土した。甕（第6図1，2），底部（同3），高坏（同4，5）等があり，甕の内面ヘラ削りはみられず，高坏にバリエーションをもつ。出土土器から，弥生時代中期後半に比定される。また覆土上層から7～8世紀代の土師器，須恵器片（第6図8～15）が出土した。



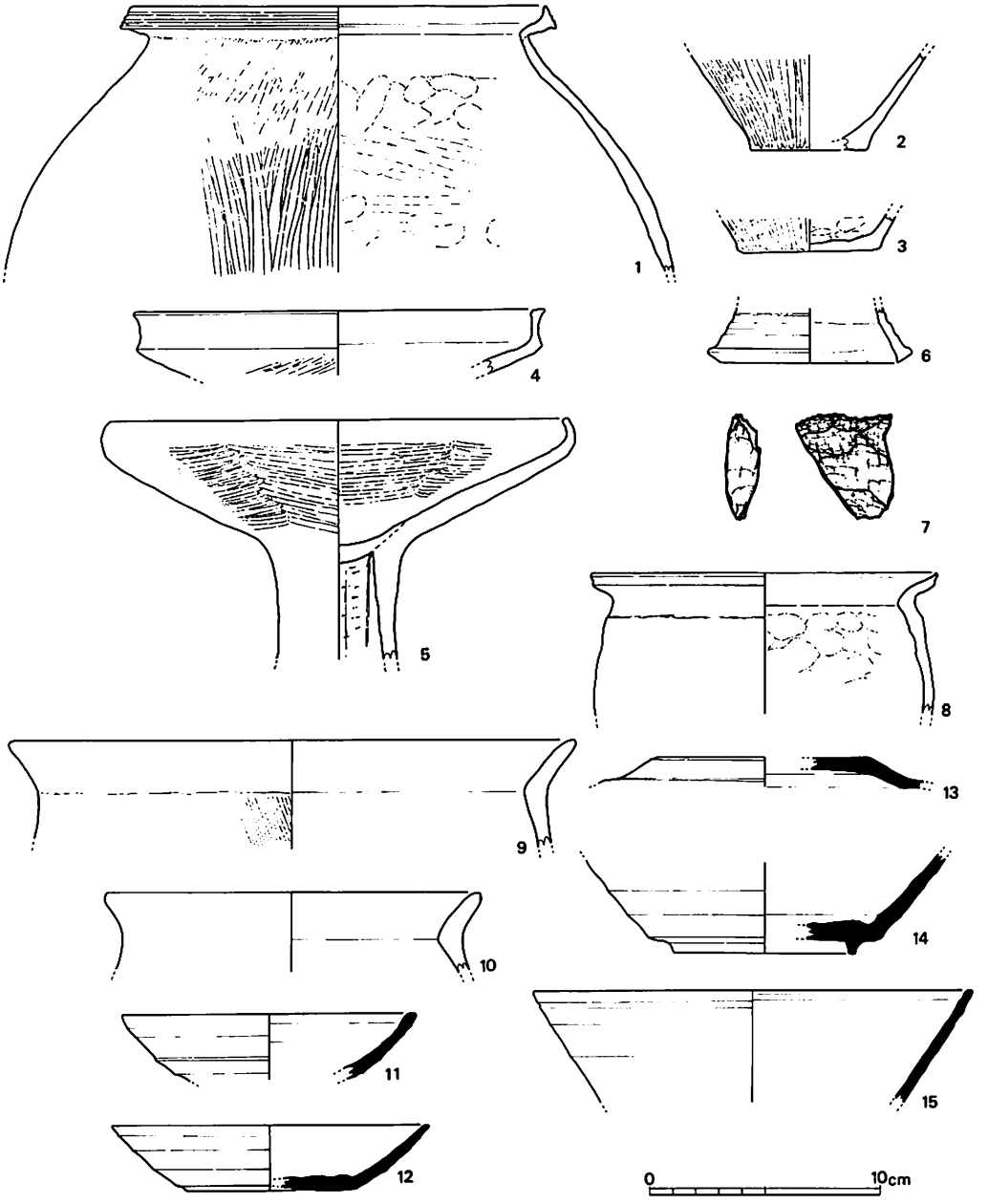
第5図　長迫遺跡第3号住居跡実測図(1：60)

第2号住居跡—ＳＢ2（第4図）

第2号古墳々丘下南東斜面際から検出した。墳丘の造成及び自然流出等によって斜面側を欠失し，南半を3号主体部に切られている。壁高約50*cm*を測る。柱穴等は検出し得なかったが側溝中で約20*cm*間隔で深さ10*cm*程のピット7個を検出した。床面から楔形石器1点（第6図7）が出土した。また本住居跡付近から，高坏脚部片（第6図6）が出土した。住居構造は第1号住居跡に共通し，これに近い時期と思われる。

第3号住居跡—ＳＢ3（第5図）

第2号住居跡から約3*m*程隔てた第2号古墳々丘北東部斜面寄りで径50*cm*，深さ40～60*cm*程のピット4を検出した。うちひとつは2号主体部により切断され，他の3個は2.1～2.2*m*間隔で主軸方位をN42°Eに並ぶ。対応するピットはなく出土遺物もない。弥生時代の遺構と思われる。



・ 1～5（第1号住居跡），8～15（同上層），7（第2号住居跡），6（第2号古墳斜面）

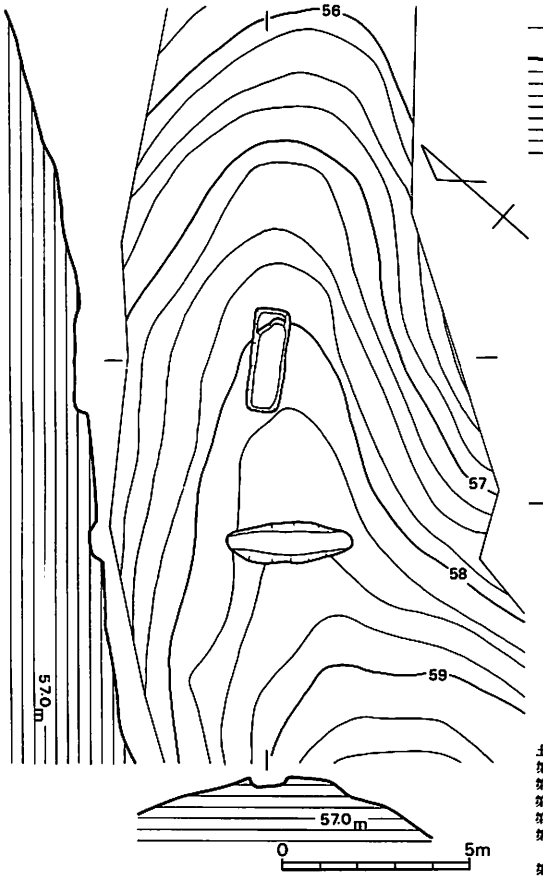
第6図 長迫遺跡第1・2号住居跡出土遺物実測図（1：3）

(2) 古 墳 時 代

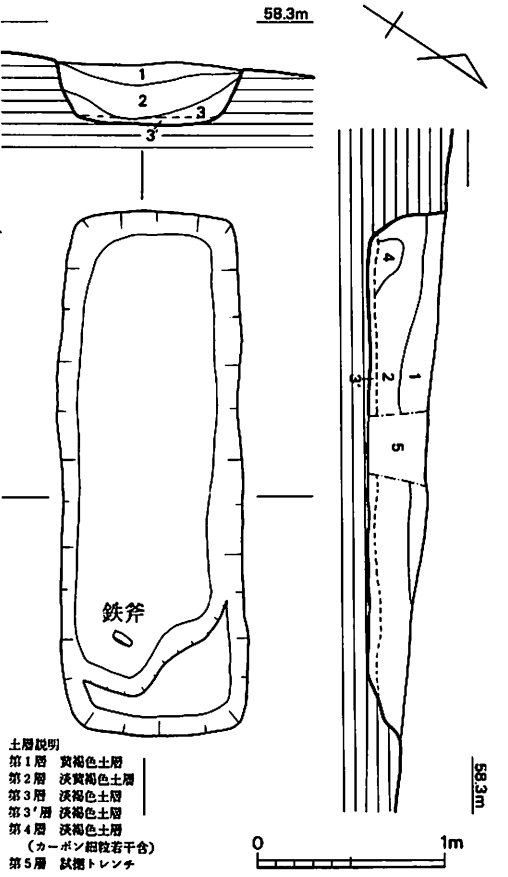
長迫第1号古墳（第7・8図，図版1—b，3）

調査区中央丘陵の北東部尾根上に位置する。植林による旧地形の変形のため墳域は判然とせず，表土層直下で遺構を検出する状態であった。背後の第2号古墳々頂部とは約3ｍの比高差を測り，その傾斜変換部付近を，長さ3.5ｍ，幅1.2ｍ，深さ20cm程の浅いU字状の溝によって区切り墳域を区画している。また，主体部を挟んで前面側では，標高57ｍの等高線付近に僅かな緩い段を認める。両側面での地山成形痕は認められないが，推定で長軸20ｍ強，短軸10ｍ前後の不整形な長方形の墳域が想定される。

主体部は墳丘中央で尾根線に平行する長方形の土坑1基を検出した。主軸方位をN56°Eにとり，長軸2.8ｍ，短軸は南西側約45cm，北東側約50cmと東北辺で開き気味となる。掘方は下端付近で緩くカーブし，東北辺側に高さ5cm弱の不整形な段をもつ。またこれとほぼ同レベルで坑底全体に第3層が堆積しているが，鉄斧（第15図1，図版6—10）の出土レベルとも一致し，棺床土と考えられる。遺物はこの他に甕口縁部（第13図1）が出土した。



第7図　長迫第1号古墳実測図（1：200）



第8図　長迫第1号古墳主体部実測図（1：40）

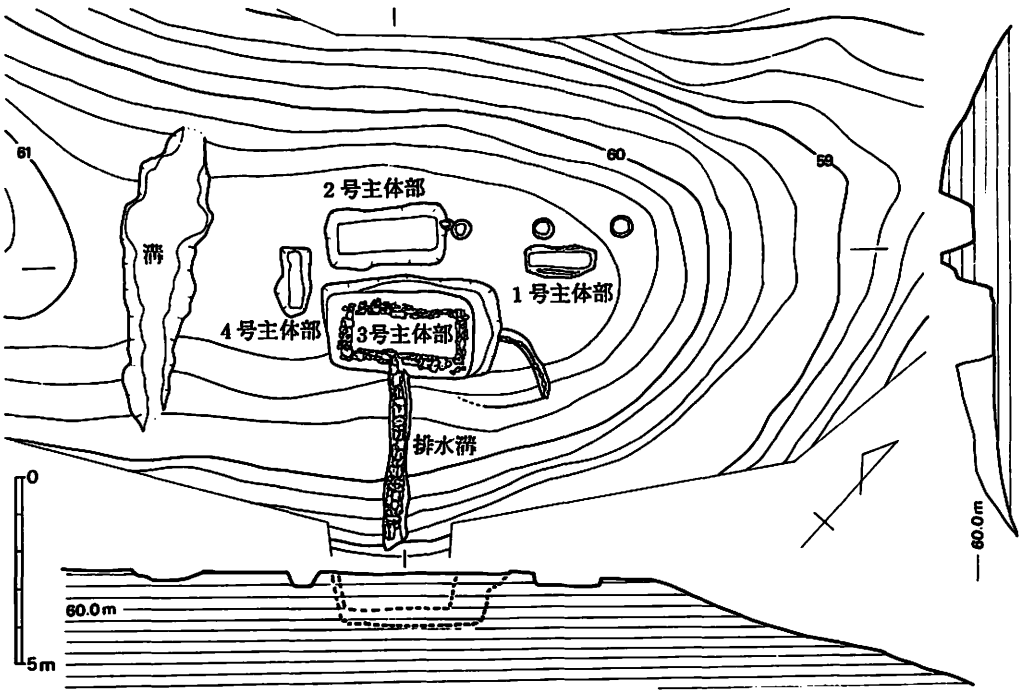
長迫第2号古墳（第9～12図，図版1—c・4）

第1号古墳から南西に約10m隔てた調査区中央丘陵の頂部東半に位置する。墳形は第1号古墳同様定形化した墳丘を成さず，一方を尾根に直交する長さ10.55m，幅3～4.5m，深さ20cmの浅い溝状遺構によって区切って，墳域を区画し，他の辺は第1号古墳側斜面の標高59～59.5mの等高線に沿って緩かな傾斜の変換が認められる。これは南側斜面に延びる3号主体部排水溝端部付近へと続くものと考えられ，溝及び溝両端付近とこれを結ぶ長軸約33m余，短軸約24m余の不整形な墳域が想定される。

主体部は墳頂部を中心に，土坑3，二重土坑の竪穴式石室1の計4基が検出された。構造及び主軸方位，配置など，その構築にあたって相互に強い規則性を窺うことができる。また第1号古墳同様，各主体部の検出面が表土層直下にあるため，盛土の有無は確認し得なかった。1号主体部の遺存状況及び二重土坑の形態をとる3号主体部の東南辺部での上端掘方の欠失の状況から若干の盛土が考えられるが，溝の形状及び古墳の遺存状況からも地山成形を主としたものであろう。4号主体部を除き，第1・2号古墳の各主体部の頭位は共に北東方向と推定される。

1号主体部（第10図，図版4—b）

第2号古墳々頂部東端に位置する。主軸方位をN55°Eにとる。長軸上端1.9m，下端1.7m，短軸上端0.8m，下端0.5mを測り，坑底プランは長方形をとるが長辺に幅10～18cm程の段状部をもつため検出面でのプランは不整形となる。断面形は第1号古墳主体部同様，下端付近で緩



第9図　長迫第2号古墳実測図（1：200）

いカーブをもち，３層のバイラン土が堆積する。最下層の第３層は長短軸ともほぼ水平に堆積し，出土遺物のレベルとも一致し，棺床土と考えられ第１号古墳主体部と同様な棺構造が考えられる。出土遺物は南側長辺の南東部第３層直上から，先端部を西面に向けた鉄鏃（第15図６・７，図版６—11・12）が２点重なった状態で出土した。付近からは乳緑色の自然円礫が出土。

２号主体部（第10図，図版４—ｃ）

第２号古墳中央部北西斜面寄りにあり，主軸方位 N55°E をとる。平面形態は長軸で上端約3.2ｍ，下端2.7ｍ，短軸は南西辺上端約1.7ｍ，下端0.8ｍ，北東辺上端約1.6ｍ，下端0.9ｍを測り一辺に僅かに開く端正な長方形を呈す。

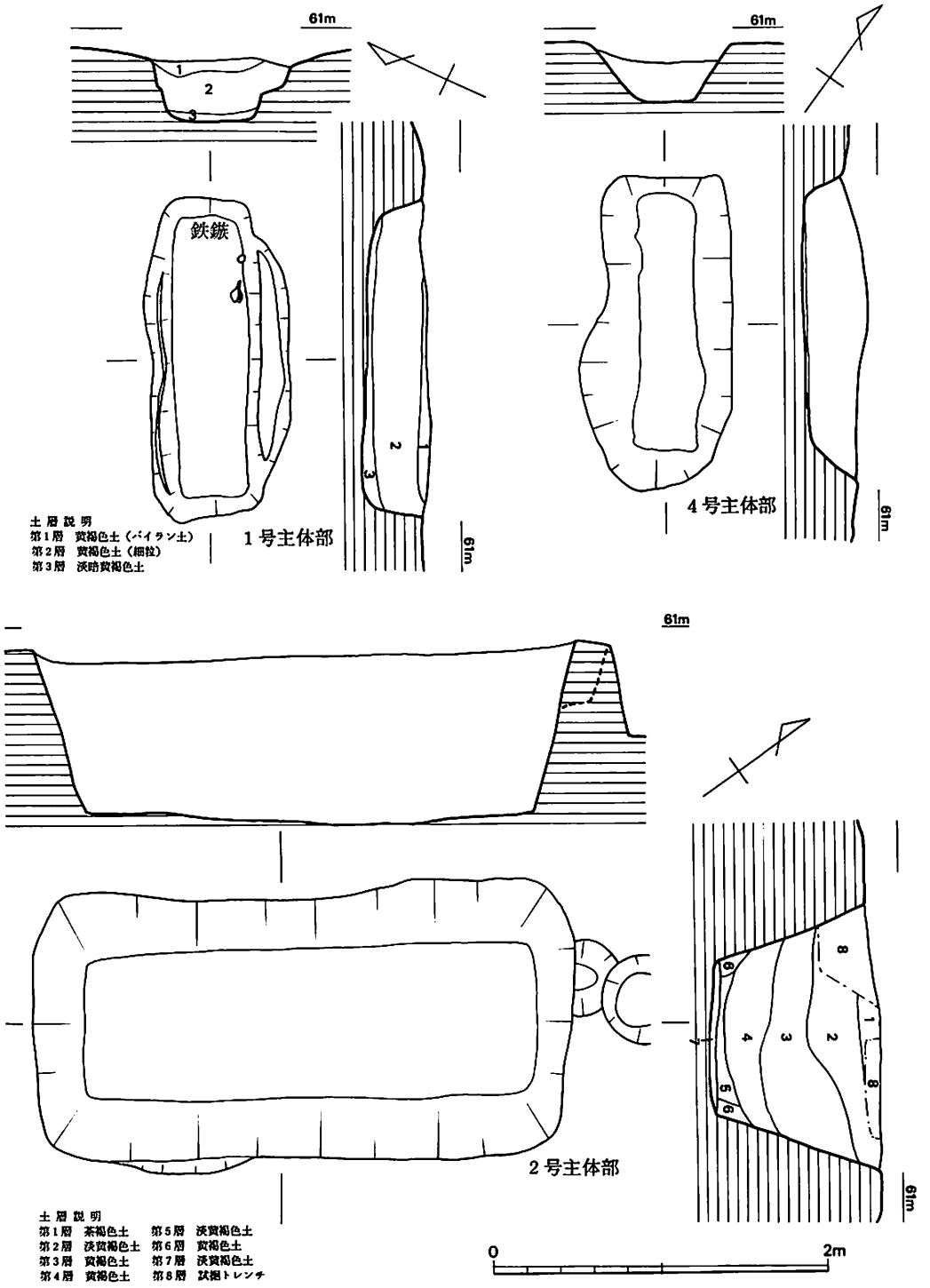
掘方は上端部から約110°前後の傾斜で掘込まれており，花崗岩々盤を掘削しているため遺存は極めて良好で，現状で約１ｍの深さを保つ。坑底面は中央北東小口寄りに緩い凹み状のカーブをもつ。土層観察では坑底面に約４cm程の棺床土が認められ，両側辺に近接して棺内充満土と裏込土が確認された。また覆土中で赤色土が散見された。

出土遺物は北東辺小口部中央の棺床土直上から鈍２点（第15図２・４，図版６—14・15）が出土した他，上層を中心に甕（第13図２），皿（同４），壺（同８・図版６—６）及び鼓形器台の可能性のある口縁部（同３・図版６—７）が各１個体分出土している。全て小片であるが器種では甕の土器片が最も多い。このうち皿は本古墳溝出土のものと胎土，調整とも類似し同一個体の可能性が高い。

３号主体部（第11・12図，図版５）

墳丘中央部やや南東寄りに位置する。竪穴式石室をなし本古墳の中心主体といえる。長軸4.65ｍ，短軸2.8ｍ，深さ1.5ｍを測り主軸方位は墓坑プランN50°Eに対し，石室はN55°Eと若干のズレを生じている。墓坑は上端から約110°の傾斜で掘込まれ，北東・南東辺で坑底から１～1.1ｍに幅30～40cmの段をもつ。これは西南辺に見られず，排水溝側では失われた可能性が高い。本来，南西辺を除き二重土坑であったものと思われる。坑底面は長軸3.15ｍ，短軸1.5ｍで，下端には幅20cm，高さ５cm弱のテラスが廻る。これは竪穴式石室基底石ラインと合致し，この内側の浅い長方形の凹みは，排水溝の接合部と同一レベルとなり，集水施設の役割を成すものであろう。

石室は粗雑な竪穴式石室を呈し両小口部，特に北東辺から排水溝にかけては最も遺存状態が良い。小口積みも散見されるが概ね広口積みをとる。両小口部根石，次いで両側辺の順に，ほぼ墓坑掘方の傾斜に沿い上開き気味に構築する。東半部に比し西半部はきわめの貧弱な観を呈す。坑底の浅い凹みには，周囲のテラス部と同レベルまで棺床土が薄く介在する。その上面で長辺2.55ｍ，短辺0.75ｍの，棺痕跡と思われる赤色土面を検出した。南東辺の東側小口部寄りから鉄槍（第15図５，図版６—16）１点が出土した。また崩落石中の拳大礫の状態から，裏込土に同礫を混入させた事が窺われる。以上のように石室内には，組合式と思われる木棺を安置し，その後，混石土により裏込を行い，土坑上段に木蓋を渡したものと思われる。また覆土中～上層から壺（第13図９・10，図版６—８）・小型器台口縁（同５）等，土師器片多数を出土し

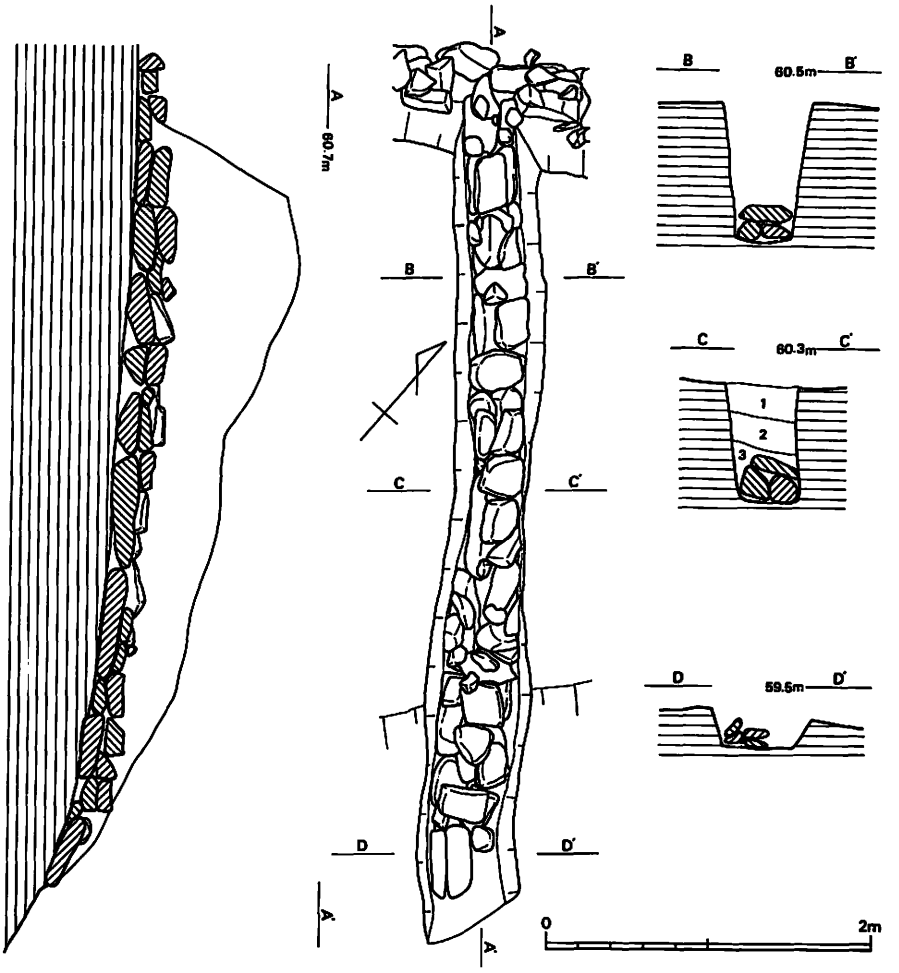


第10図　長迫第2号古墳1・2・4号主体部実測図（1：40）

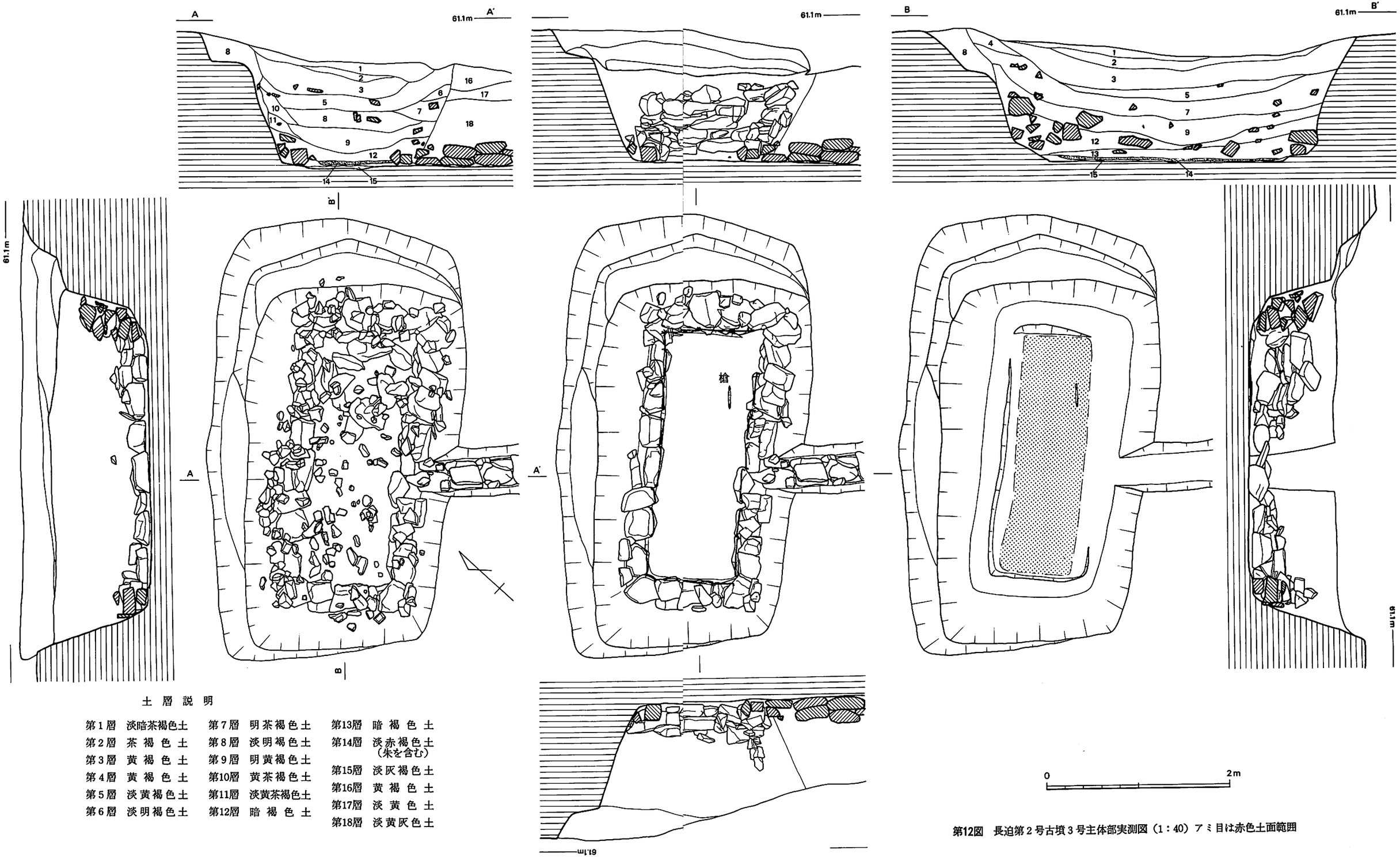
た。排水溝（第11図・図版５—６）は長さ5.2m，幅0.5m，深さ約１mで，墓坑から直交する。入水部は坑底の凹み部とレベルを同じくし約50cmのレベル差で端部に至る。石室主軸とは直角とならず，墓坑掘削と同時に掘下げ，石敷きの後，石室構築の前後には既に埋戻されていたと思われる。また同溝端は，溝底の傾斜等との状態から，本来の端部に近い部分と思われる。

４号主体部（第10図）

２・３号主体部の南西に約50cm程隔てて隣接し，他の３基の墓坑と主軸方位を直交（N35°W）させる。墓坑は中央で松の根による撹乱を受けていたため，平面プランは部分的に乱れるが，長軸1.85m，短軸0.75mを測り，上端からの掘込みは約130°と他の墓坑に比べ緩い。撹乱が著しいため土層観察は成し得ず棺床土等については不明であるが下端プランは長軸1.55m，短軸0.4mの端正な長方形を呈す。鉇（第15図３・図版６—13）が１点出土した。



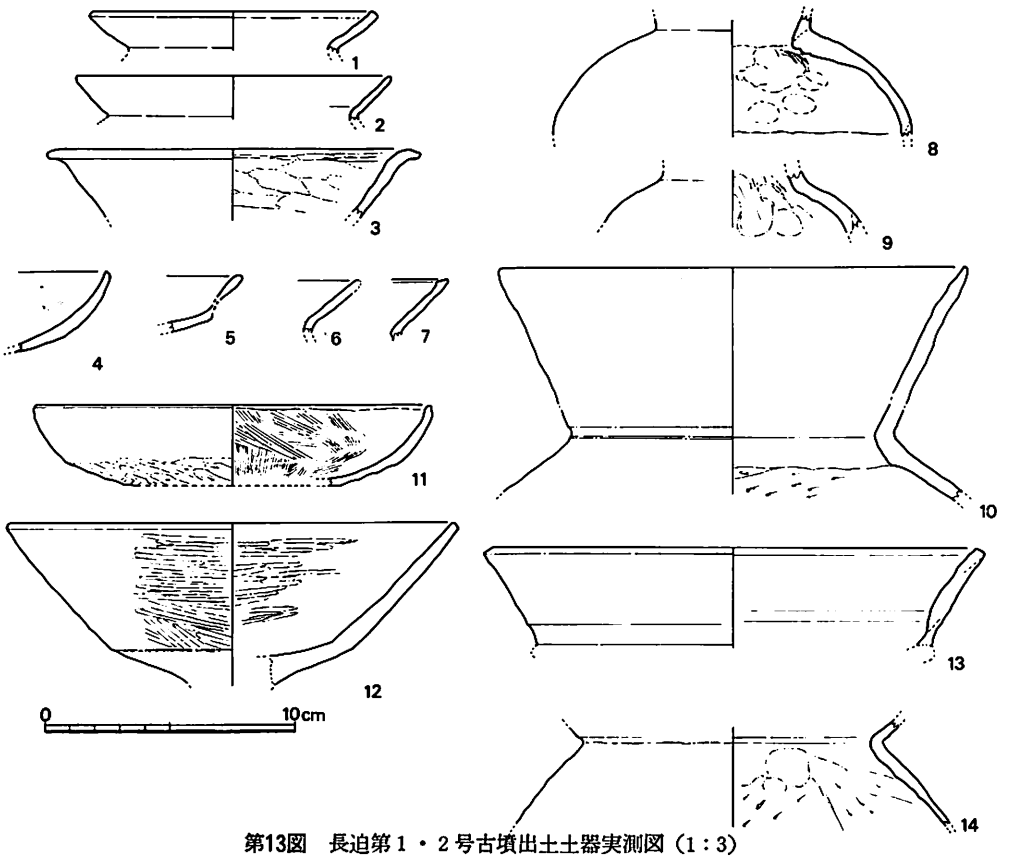
第11図　長迫第２号古墳３号主体部付設排水溝実測図（1：40）



土 層 説 明

第1層 淡暗茶褐色土	第7層 明茶褐色土	第13層 暗 褐 色 土
第2層 茶 褐 色 土	第8層 淡明褐色土	第14層 淡赤褐色土（朱を含む）
第3層 黄 褐 色 土	第9層 明黄褐色土	第15層 淡灰褐色土
第4層 黄 褐 色 土	第10層 黄茶褐色土	第16層 黄 褐 色 土
第5層 淡黄褐色土	第11層 淡黄茶褐色土	第17層 淡 黄 色 土
第6層 淡明褐色土	第12層 暗 褐 色 土	第18層 淡黄灰色土

第12図 長迫第2号古墳3号主体部実測図（1：40）アミ目は赤色土面範囲



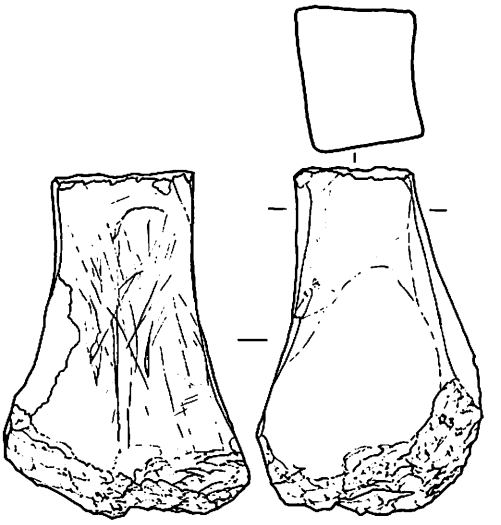
第13図　長迫第１・２号古墳出土土器実測図（1：3）

遺　物

土器（第13図，図版６）

図示し得たものは14点で，いずれも古式土師器である。各主体部以外に，第２号古墳々丘（第13図13・14），同古墳溝底（同６・７・11・12）からも出土した。第２号古墳２号主体部（同２～４・８），同３号主体部（同５・９・10）出土のものは覆土中・上層にかけてであり，いずれも細片化している。

器種別では，甕・壺・高坏・皿及び小型器台，鼓形器台と思われるもの，壺もしくは鉢の口縁部などがみられ，５・８・９・12は精選された胎土で，風化の進んでいる８を除き，丹塗痕跡が窺われる。個別的な時期差は下し



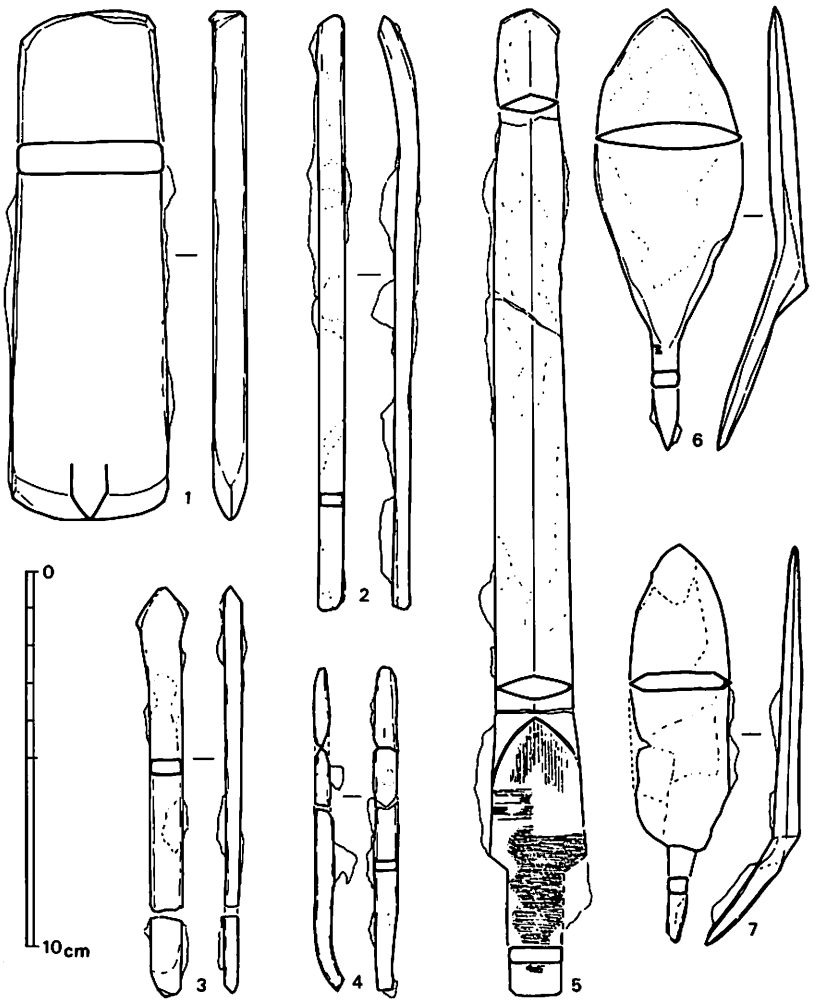
第14図　長迫第２号古墳溝出土石器実測図（2：3）

得ないが，概ね布留Ⅰ式に対比される。

鉄器（第16図，図版６）

鉄器は総計７点がある。その内訳は斧１・鉇３・槍１・鏃２で，すべて古墳の主体部に副葬されていたものである。斧（第15図１，図版６—10）は短冊形で残存状態の良好なものである。鉇（第15図２～４，図版６～13～15）は大小あり，銹化が著しい。槍（第15図５，図版６—16）は柄の一部が残存するなど，良好なものである。鏃（第15図６・７，図版６—11・12)は両者でやや形態が異なるが，茎が同じように折曲がっている。これらはいずれも４世紀後半を前後する時期のものと思われる。

その他，第２号古墳溝底から古式土師器と共に砥石(第14図)が出土している。よく磨滅した上砥と思われる。３号主体部内から安山岩製チップが出土しており，第２号住居跡半壊時の混入かと思われるが即断しかねる。



１（第１号古墳主体部），６・７（第２号古墳１号主体部），２・４（同２号主体部），５（同３号主体部），３（同４号主体部）

第15図　長迫第１・２号古墳各主体部出土鉄器実測図（1：2）

第1表　長迫遺跡出土遺物観察表

土　器

器種		挿図番号	法量(cm)	形態・技法
弥生土器	甕	6—1	口径　18	体部はナデ肩で，頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は，短く外上方に伸び，端部は上方に拡張させ，その外面には凹線が3条めぐる。体部外面は頸部以下をタテハケメ，それ以上をタテヘラ磨きで，内面はナデ及び板状工具によるナデつけ。口縁部はヨコナデ。
		6—2	底径　5	6—1の底部と思われる。外面はタテヘラ磨き，内面はナデ。
		6—3	底径　6.3	底部片である。平底で,外面はタテヘラ磨き,内面・底面はナデ。
	高坏	6—4	口径　18	坏部片で，口縁部は外反気味に直立し，端部は外方にやや肥厚させ，口縁部と体部との境には強い稜がつく。体部は内外面ともていねいな弧状ヘラ磨き。
		6—5	口径　20	脚裾部を欠くもので，体部は比較的深く，口縁部は短く内湾し，その境は稜を持たない。円板充填法をとる。体部は内外面ともていねいな弧状ヘラ磨き，口縁部はヨコナデ，脚柱部内面はていねいなヘラ削りで，ヘラ先痕が残る。
		6—6	脚径　7.7	脚裾部片で，外反し，端部は外上方に拡張する。外面には3条の凹線，内面はヘラ削り。
土師器	甕	6—8	口径　15	口縁部～肩部片で，体部は肩の張らないもので，口縁部はくの字に短く外反し，端部はわずかにつまみ上げる。胴部外面・体部内面はナデ，口縁部・頸部外面はヨコナデ。
		6—9	口径　24.6	口縁部片で，くの字に外反し，端部は丸く終わる。体部外面はハケメ，内面はヘラ削り，口縁部はヨコナデ。
		6—10	口径　16.4	口縁部片で，短く外反し，端部は丸く終わる。体部内面はヘラ削り，口縁部はヨコナデ。
		13—1	口径　11.5	口縁部片でやや外湾気味に外反する単純口縁で，端部は角ばって内面にわずかに肥厚している。内外面ともていねいなヨコナデ。
		13—2	口径　12.7	くの字状に折返した単純口縁で，直線的に外反する。内外面ともヨコナデ。
		13—6		やや外湾気味に外反する単純口縁である。内外面ともヨコナデ。
		13—7		ほぼ直線的に外反する単純口縁で，端部内面で肥厚気味となる。内外面ともヨコナデ。
		13—14	頸部径12	頸部～肩部片で，体部は肩が張らず，口縁部は端部を欠失するが，外湾気味と思われる。頸部外面はヨコナデ，肩部より下半の内面はヘラ削り，頸部下半の内面は押圧痕を残す。
	壺	13—8	頸部径 6.5	頸部～肩部片で，やや肩の張った球形に近いものと思われる。体部外面は風化のため，詳細不明。内面は押圧後，ヨコナデ。胎土精選。
		13—9		肩部片で,接合部で破損している。外面は風化のため,詳細不明で

				あるが，丹塗痕がある。内面は押圧成形後，粗いナデ。胎土精選。
		13—10	口径　18.8 頸部径13	口縁部～肩部片で，頸部は内面に稜をもち，口縁部は直線的に長く外反し，端部付近で一層外反して丸く終わる。体部内面はヘラ削り，口縁部はヨコナデ。
		13—13	口径　20	二重口縁の壺あるいは鉢の口縁部片で，端部は平坦面を持つ。内外面ともヨコナデ。
	高坏	13—12	口径　18	深めの坏部片で，ほぼ平坦な体部からにぶい稜を持って口縁部に移行し，直線的に外上方へ伸び，口縁端部は角張って終わる。内外面ともていねいなヨコヘラ磨きで，丹塗がされており，胎土精良。
	器台	13—3	口径　15	鼓形器台等の口縁部片と思われる。口縁部は外湾気味に外反し，端部はさらに外反させ，ほぼ水平に伸びる。口縁部内面は粗いヘラ磨き，外面下半は風化のため詳細不明，端部はヨコナデ。胎土精選。
		13—5		小器台の口縁部と思われ，体部より緩い段をもって外反する口縁部へ移行し，端部は外反気味で丸く終わる。内面はヘラ磨き，内外面とも丹塗り，胎土精選。他に脚部片円孔部片がある。
	皿	13—4		底部を欠失するもので椀状を呈す。底部外面はヘラ削り，口縁部外面及び端部はヨコナデ，口縁部内面はヨコハケメ。
		13—11		底部を欠失するが，全体的に内湾するもので，口縁端部はわずかに内面に肥厚させている。底部外面はヨコヘラ削り，口縁部外面や端部はヨコナデ，底部内面は放射状の，口縁部内面は斜方向の細かなハケメ。
須恵器	坏身	6—11	口径　12.8	底部を欠失するもので口縁部は内湾気味に広がり，端部はやや角ばって終わる。体部外面はヘラ削り，口縁部は回転ナデ。
		6—12	口径　13.8	底部は平坦で，口縁部は緩やかに外上方へ伸びる。回転ナデ仕上げで，薄手。
		6—14		高台のつくもので，口縁部・底部中央を欠失する。底部は平坦で，口縁部は外上方へ伸びる。高台は小さな箱型である。内外面とも回転ナデ。
		6—15		口縁部片で外上方に伸び，端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデ。
	坏蓋	6—13		天井部中央及び口縁端部を欠くもので，平坦な天井部よりやや屈曲して口縁部へ移行する。内外面とも回転ナデ。

石　器

器　種	挿図番号	法　量 (cm)	形　態・技　法
楔形石器	6—7	長　2 幅　2.2 厚　0.6	表裏に素材剥片の平坦な面を残す。両辺は潰れ，両端に同一方向からのネガティブとポジティブな裁断面がある。安山岩製。30g
砥石	14	長　10.2 幅　3.2～5.7 厚　2.5	半欠，中央部で緩く内湾する四角柱を成し一端に剥離面を残す。また剥離面の稜部は磨滅する。一面には使用痕と思われる主に縦方向の擦痕が密集。石材は凝灰岩製と思われ，緻密で淡乳黄褐色。 227.2g

鉄　器

器　種	挿図番号	法　量 (cm)	形　態・技　法
斧	15—1	長　13.5 幅　3.8～4.3 厚　0.9～1.0	短冊形を呈す。刃はゆるく蛤刃状に外湾し，両刃である。木質の付着の痕跡はみられない。頭部には打撃痕が残る。鍛造。 274.6g
鉋	15—2	長　15.7 幅　0.7 厚　0.5～0.6	幅に比べ，長い茎部を持つ。刃部は先端を欠失し，かつ銹化が著しく，裏すきは不明。先端部反り 8mm。鍛造。16g
	15—3	長　10.7 幅　0.9～1.4 厚　0.4～0.5	茎部は幅に比べ，短い。鍛造。 6.1g
	15—4	長　8.6 幅　0.6 厚　0.5	茎部は幅に比べ，短い。鍛造。 6.1g
槍	15—5	長　26.0 幅　1.5～2.6 厚　0.4～0.6	両刃で，柄の一部が残存しており，呑口式の拵である。茎部には糸巻痕がある。目釘穴は銹化が著しく不明。鍛造。 118.5g
鏃	15—6	長　12.1 幅　0.8～4.0 厚　0.5～0.8	有茎の広根式である。柳葉形でやや椿葉形に近い。茎は約30度折れ曲がっており，故意に曲げたものであろう。鍛造。44.3g 両丸造
	15—7	長　11.1 幅　0.5～2.7 厚　0.5～0.7	有茎の広根式で，柳葉形を呈す。茎は13—6 同様約30度に折れ曲がっている。鍛造。両丸造。23.1g

Ⅳ まとめ

今回の長迫遺跡の調査では，昨年の石鎚権現遺跡群[①]同様，弥生時代中期の住居跡と前期古墳群を検出した。これは従来，調査例が少なく不明瞭であった芦田川右岸地域の当該期の様相を知るうえで貴重な資料といえる。以下時代別に問題点を概観しまとめとしたい。

弥生時代　住居跡２軒のほか，所属時期不明の溝状遺構，柱穴列各１を検出した。住居跡は共に壁溝中に小支柱を多く配するもので，遺存の良い第１号住居跡では，正円形で２本柱の構造をもつ。また当住居跡は斜面上方をカットした平坦面をもつ。カット面下端に溝状遺構をもつことから，屋外排水施設とも考えられる。出土遺物は覆土上～中層で７～８世紀代の土師器・須恵器片が出土したほか，住居跡床面，テラス面の直上から弥生土器が出土した。このうち甕は内面ヘラ削りは見うけられず，口縁部拡張も概して顕著なものでない。高坏は坏部口縁端を内湾ぎみに丸くおさめるものと，直立して端部を外反するものがみられる。ともに弧状ヘラ磨きを行う。後者は小片の為，混入のおそれもあるが，前者では円板充填法をとり，脚柱部内面は丁寧にヘラ削りされる。これらは出土量と組成内容に欠けるが駅家住宅団地造成地内の池ノ内遺跡[②]住居跡群[③]のものに後続し，吹越第２号古墳丘下の第３号土坑出土一括遺物と比べ内面ヘラ削り，口縁部仕様等，これにやや先行する感をもつ。中期後半でも甕内面のヘラ削りが顕在化する直前頃であろうか。一部に混入品が見られるため判然としない。

古墳時代　前半期古墳２基を検出した。いずれも丘陵尾根線上に，一方を尾根に直交する溝によって，更に他辺は若干の地山成形を施したものと思われ，僅かな盛土は考えられるものの，整然としたマウンドを有する墳丘は想定し難い。

主体部は第１号古墳が１基に対し，第２号古墳は排水溝[④]をもつ竪穴式石室[⑤]を中心に３基の墓坑が規則的に配置されている。主体部数，墓坑規模・構造に差異を示す反面，副葬品は鉄器各１～２点で，武器と工具の差をもつ。鏡，玉類のセットを欠き，その貧弱さが目立つ。

次にその築造年代は，第１，２号古墳間で時期差を示すものを欠き，ともに出土した古式土師器から，布留Ⅰ式の内で把えられ[⑥]，各主体部出土の鉄器類も，第２号古墳１号主体部の鉄鏃に若干の時期幅が考えられるが概ね４世紀後半を中心とした築造年代[⑦]が考えられる。

以上，当古墳群は，出土遺物，排水施設をもつ竪穴式石室構造などに前期古墳の特徴を示すものの，その墳丘構造，集団墓的な複数埋葬等に，いまだ伝統的な側面を色濃く残している。これは，隣接する石鎚権現古墳群中，最大の墳丘を示し布留Ⅱ式段階で成立する同第５号古墳[⑧]（前方後円墳）以外の墳丘構造，埋葬状況とも共通性をもち，三角縁神獣鏡などの出土で有名な潮崎山古墳[⑨]，掛迫古墳[⑩]ならびに加茂・石鎚山１号古墳等の，地域の中でも卓越した古墳被葬者とは対蹠的な状況を示す。同地域における古墳時代への移行過程の複雑な様相を反映するものであろう。第２表に示す様に，当地域における弥生時代後期の墓制ならびに後期後半～布留式土器群の成立にかけて，充分に把握されておらず，今後両者の研究・編年作業を基礎に，地域における古墳時代社会への移行とそれに内在する諸問題の解明が課題とされる。

註① (財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鎚権現遺跡群発掘調査報告』1981。広島県教育委員会『石鎚権現古墳群，第6・7・8号古墳発掘調査報告』1981。

② 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976。

③ 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鎚山古墳群』1981。

④ 同上③の石鎚山第1号古墳のそれと類似するが，規模，底面の敷石状況等で劣る。

⑤ 類似する石室構造は弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけ，播磨，吉備，安芸，及び四国の一部に分布。各地域の伝統的な墓制を残す。その共通性，系譜等の背景が問題とされる。

⑥ 小片が多く不鮮明な点が多い。藤田憲司氏編年（考古学雑誌，1979）の山陽第Ⅴ期，高橋護氏編年（考古学ジャーナル，1980）のⅩC期の一部に対比されよう。

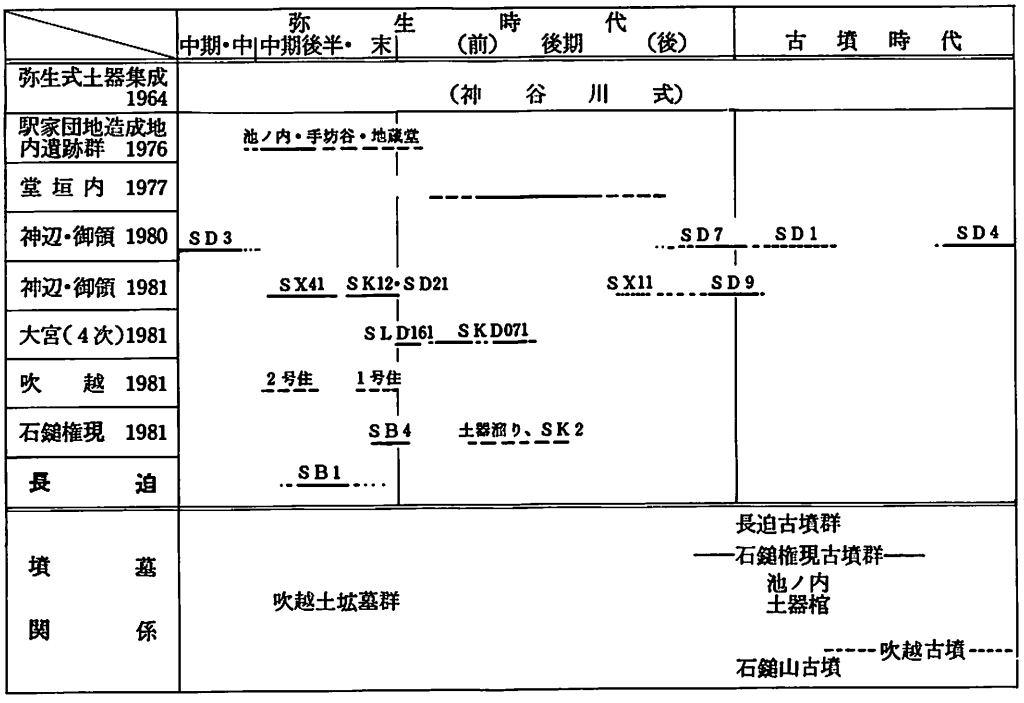
⑦ 山陽団地埋蔵文化財調査研究所『用木山古墳群』1975，奈良県立橿原考古学研究所編「メスリ山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第35冊 1977他。

⑧ 第5号古墳主体部は竪穴式石室系の積石磔梆状をなし，排水施設を有していた可能性がきわめて高く，本遺跡第2号古墳3号主体部との関連が注目される。

⑨ 脇坂光彦「広島県芦品郡潮崎山古墳について」『古代学研究』第90号 1979。

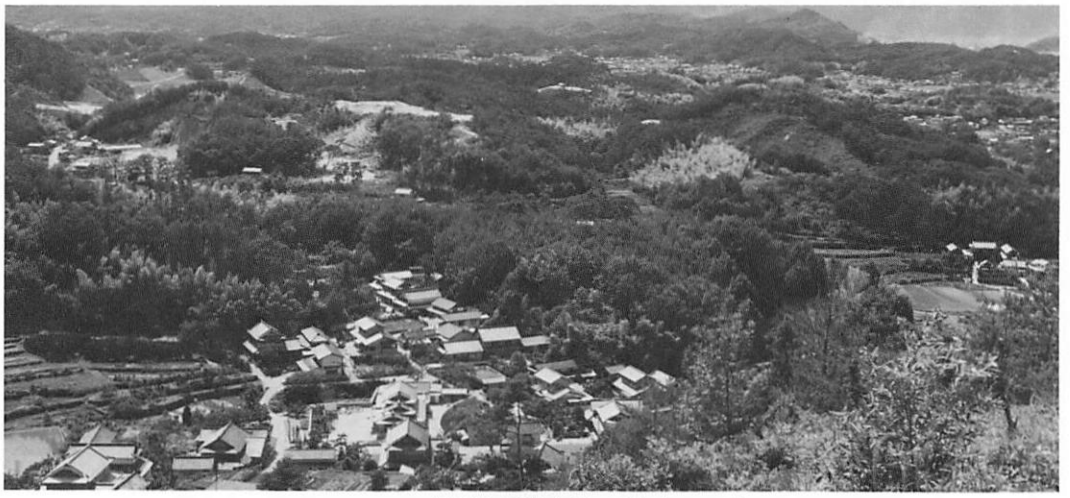
⑩ 掛迫古墳調査団「備後掛迫古墳」『芸備文化』第5・6合併号 1956。

第2表 周辺遺跡対比表



(註) 弥生時代と古墳時代との区分は，当地の庄内併行期から布留式への移行が不鮮明なため，ここでは一応，在地色を一掃する布留式傾向甕等の土器群の成立をもって画した。

図版１

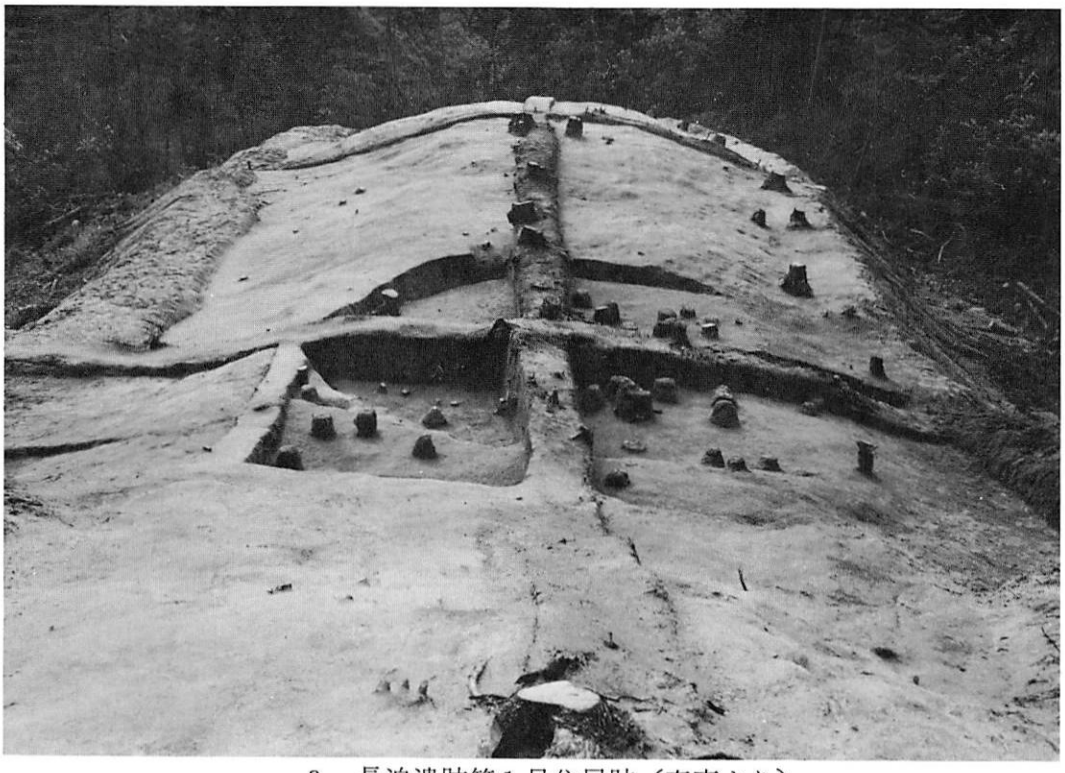


a　長迫遺跡遠景（南東より）

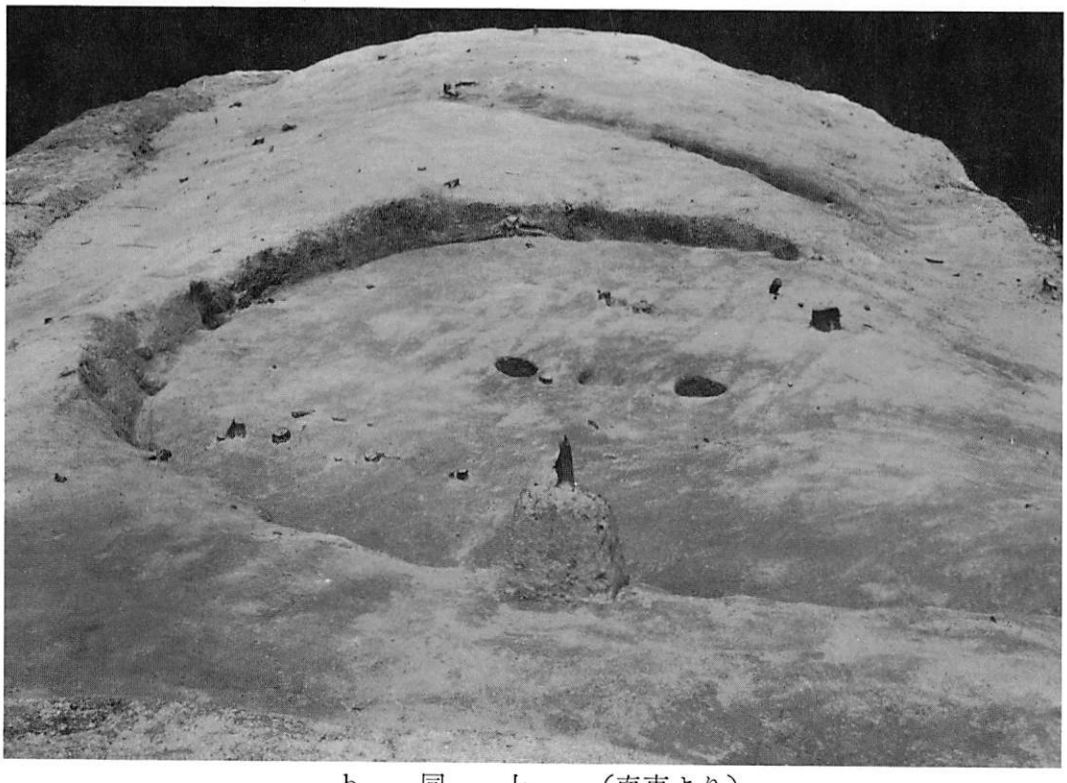
b　長迫第１号古墳調査前全景（南より）

c　長迫第２号古墳調査前全景（南西より）

図版 2



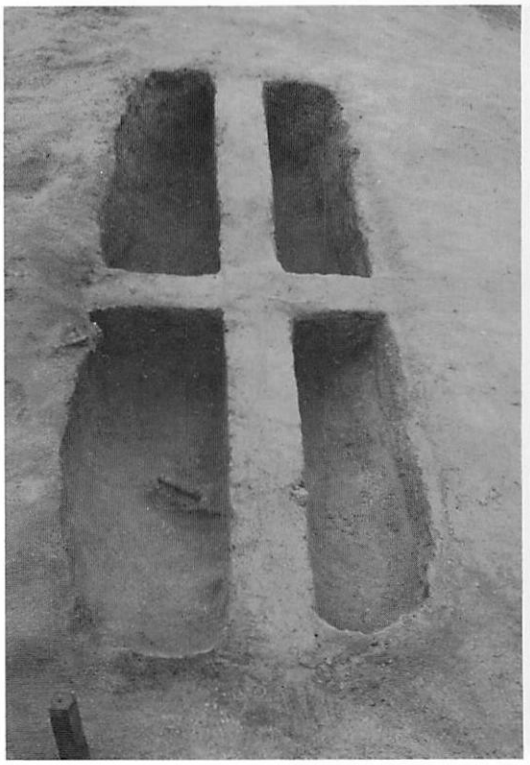
a　長迫遺跡第１号住居跡（南東より）



b　同　上　（南東より）

図版 3

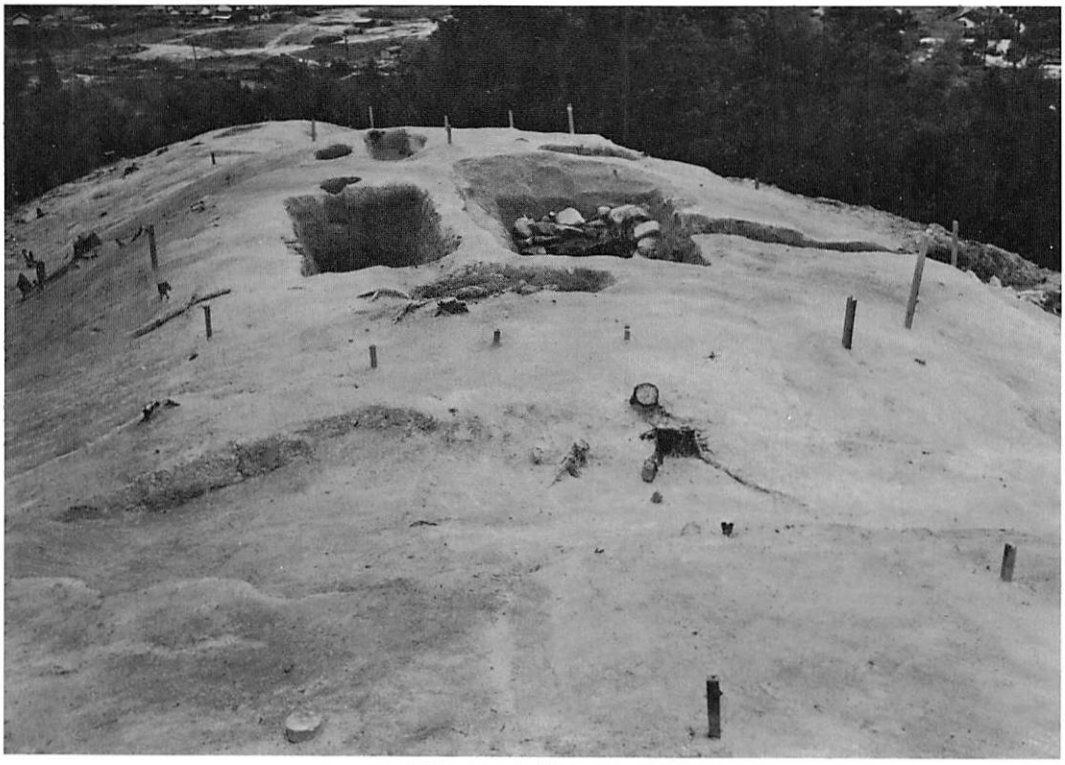
a　長迫第１号古墳全景（南より）



b　同　上　主体部（北より）

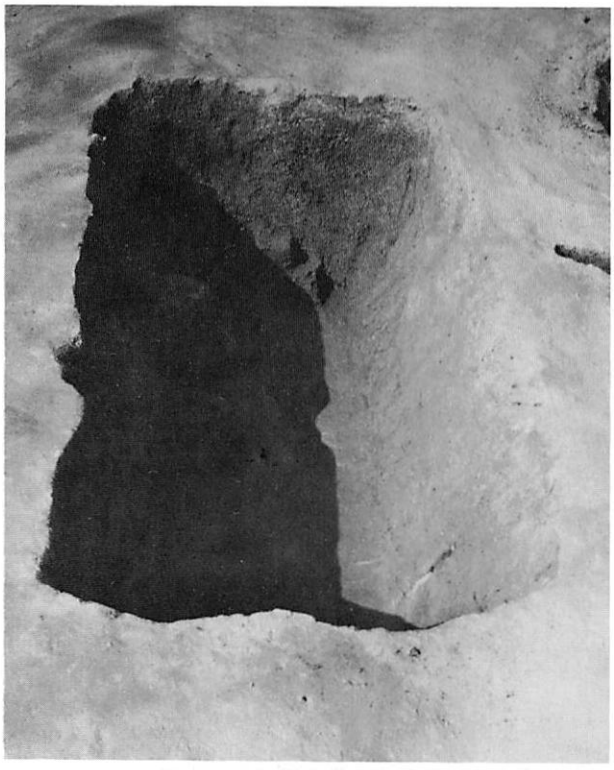
c　同　上　溝　（南より）

図版 4



a　長迫第２号古墳全景（南西より）

b　同上　１号主体部（南西より）



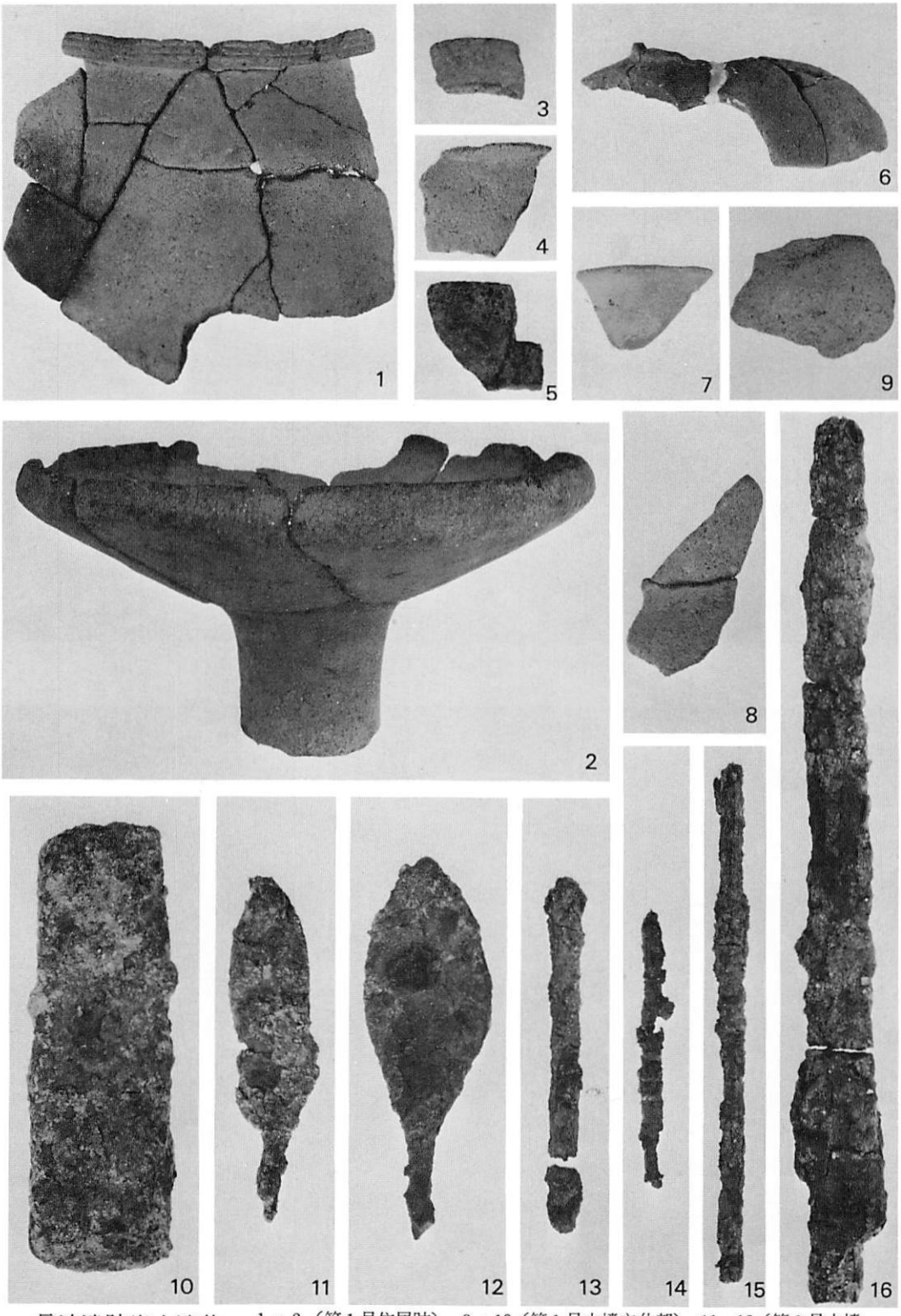
c　同上　２号主体部（南西より）

図版 5

a　長迫第２号古墳３号主体部（南西より）

b　　同　上　　付設排水溝（左：北西より，右：南東より）

図版 6



長迫遺跡出土遺物　1・2（第1号住居跡），3・10（第1号古墳主体部），11・12（第2号古墳1号主体部），6・7・14・15（同2号主体部）8・16（同3号主体部），13（同4号主体部），9（同溝），4・5（同墳丘）

長迫遺跡発掘調査報告

—県営畑地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

昭和57（1982）年3月

編集・発行　広島県教育委員会
（財）広島県埋蔵文化財
調査センター

印　　刷　株式会社　柳盛社印刷所